

研究プロジェクト成果報告書（一般研究）

研究課題 「小学校英語指導におけるファシリテーション技術を取り入れた協同的な活動の開発」

研究期間 平成30年度～平成31年度（令和元年度）

研究代表者	大場浩正	上越教育大学大学院・教授（英語教育学・教育方法学）	研究・実践の総括，指導方法の開発，教材の開発，実践補助
研究組織 （平成30年度）	宮澤忠明	上越市立浦川原小学校・校長（教育学一般）	1年目の実践校の校長としての実践の総括指導方法の助言，教材開発の助言，実践の助言
（平成30年度）	塚田紗樹	上越市立浦川原小学校・教諭（教育学一般）	1年目の実践校において英語指導実践を行う，指導方法開発の助言，教材開発の助言
（平成30年度）	石野佑紀枝	本学大学院言語系教育実践コース（英語）295311M（現職）（英語教育学）	1年目の実践校において指導実践の補助，指導方法開発の助言，教材開発の助言
（平成30年度）	小磯雅浩	本学大学院言語系教育実践コース（英語）295318J（現職）（英語教育学）	1年目の実践校において指導実践の補助，指導方法開発の助言，教材開発の助言
（平成31年度/令和元年度）	高井季代子	本学教職大学院先端教科・領域開発研究コース（小学校英語）20195613B（現職）（英語教育学）	2年目の実践校において英語指導実践を行う，指導方法開発の助言，教材開発の助言
（平成31年度/令和元年度）	金澤直哉	本学教職大学院先端教科・領域開発研究コース（小学校英語）20195608G（英語教育学）	2年目の実践校において英語指導実践を行う，指導方法開発の助言，教材開発の助言
（平成31年度/令和元年度）	井口元貴	本学教職大学院先端教科・領域開発研究コース（小学校英語）20195601P（英語教育学）	2年目の実践校において英語指導実践を行う，指導方法開発の助言，教材開発の助言

## 【研究成果の概要および学校現場や授業への研究成果の還元について】

本研究では、英語教育の専門家（研究代表者）が中心となり、小学校との連携において、話し合いやコミュニケーションを効果的にするファシリテーションの技術や協同学習の理念と技法を活用した小学校英語の指導方法と教材を開発し、それらを用いた実践を行うことであった。そして、最終的には全ての小学校教員が容易に使用できる英語指導書と教材を開発することであった。これらの目的を達成するために、以下、2つの小学校における英語指導実践の内容と成果を述べる。

### <1年目：上越市立浦川原小学校における取組>

平成30年度は、上越市立浦川原小学校において、外国語（英語）活動にファシリテーション技術を取り入れた協同的な活動への支援を行った。以下では、浦川原小学校における外国語（英語）活動の実践とその研究成果の概要を述べる。

平成30年度、上越市立浦川原小学校の校内研修のテーマの1つは「外国語活動・外国語科の授業づくり」であった。目指す子どもの姿は、「進んで外国語を用いて、コミュニケーションを図ろうとする」ことであり、具体的な取組は、いかの3項目であった。

1. 「分かる・できる・楽しい」授業構成を構築する。
2. 簡単な語句や基本的な表現を用いながら、友達とのかかわりを大切に活動工夫する。
3. 実態を踏まえ、付きたい力と学びが連続する年間計画を作成する。

また、研修内容に即した授業研究と授業協議会を実施した。年間の主な計画は次の通りであった（2018年度）。

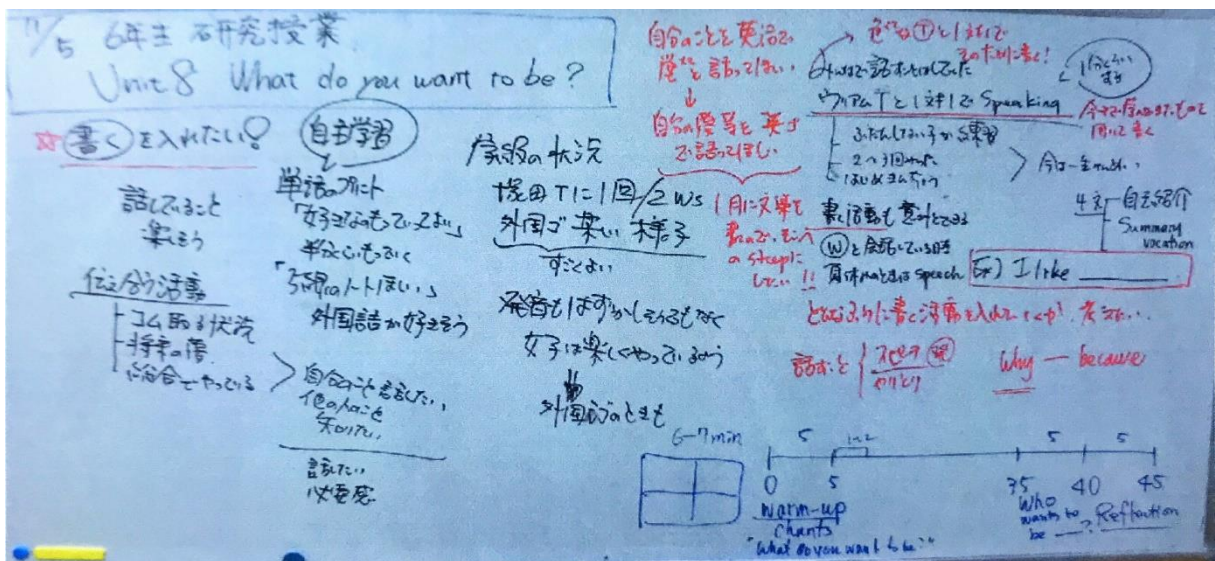
月	校内研修に関する取組み
4	・外国語活動・外国語科のミニ研修会
5	・外国語活動・外国語科の目標及び内容等についての（読み合わせ）
6	・外国語活動・外国語科の授業作り研修 6/4 ・授業研究① 6/11（2年生） ・授業研究① 6/25（5年生）
7	
8	
9	・授業研究① 9/10（4年生）
10	・授業研究① 10/1（3年生）
11	・授業研究① 11/5（6年生）
12	
1	・授業研究① 1/21（1年生）
2	
3	・来年度の研究の方向検討

各授業研究では、学級担任が外国語活動・外国語科の授業（T・Tも可）を実際に行い、その後、協議会を行った。

本研究代表者は、授業研究による各学級担任の授業公開に先立って、授業構想について

打ち合わせに参加した。そこでは、外国語活動・外国語科の授業を実際に担当する学級担任と研究推進部の教員がどのような授業構成にするかを話し合った。話し合いにおいては、予め学級担任がたたき台としての授業構想案を提示し、ファシリテーション技術の1つであるホワイトボード・ミーティング®の企画会議のフレームワークを用いて話し合った。ファシリテーターは研究代表者が務めた。

一例として、11月5日（月）の5時間目に行われた、6年生の校内授業研究に関して述べる。事前の打合せは、10月22日（月）に行った。公開した授業は、「We Can! ② Unit 8 What do you want to be?」（将来の夢を伝え合うこと）であった。まず、本研究代表者が、授業予定者より、ホワイトボード・ミーティング®の企画会議のフレームワークを用いて授業構想について聞き、ホワイトボードの書いた（下記ホワイトボード参照）。



このインタビューの中で、次のようなやり取りが行われた。

○外国語学習は、どう？→○○先生と TT で取り組んでいる。発話も恥ずかしがらずする子どもが多く、楽しく活動をしている。「書く」については、単語の練習に積極的に取り組む子どもが多く、4線プリントを持ち帰って学習している。

○総合で「生き方」の学習をしており、将来の夢について考えている。英語でも、将来の夢について語らせたい！話させたい！

○「話すこと」の活動には、「やり取り」と「発表（スピーチ）」があるが、本単元では、両方に取り組みたい。「話す」ためには、その内容を確認にもっていること必要である。

『～になりたい。（なぜかという）～が好きだからである。そのために～励みたい。あなたは、何になりたいですか?』など、3文～5文程度を英語で書き、それをもとにして、「やりとり」と「発表（スピーチ）」にのぞむ。

○例えば、次のような「発表（スピーチ）」ができると良い。

I want to be a teacher. I like children. I'm good at singing. I want to sing with children. I study hard. Thank you. What do you want to be?

○本時は、「やり取り」の活動を4人グループで数回（4回くらい）行いたい。次時は、それをもとにして「発表（スピーチ）」。

上記のやり取りを受けて、本研究代表者が以下のアドバイスを行った。

どんなやり取りができそうか？→「I want to be～」の後、ファシリテーション技術としてのホワイトボード・ミーティング®の質問の技カードにおける **Open Questions**（オープン・クエション）と **Eight types of Responses**（あいづち）の中から、**Tell me more (details). For example? Uh-huh. I see. Yes. Really.** などを用いて「やり取り」の活動を行ったらどうか。

活動の2つ目として、子どもが書いたものを予め読み、誰のかを当てる聞く活動を行い、「やり取り」の活動だけで終わらないようにする。

このように、事前の打ち合わせで、ファシリテーション技術としてのホワイトボード・ミーティング®の手法を用いて授業構想を練った。また、ホワイトボード・ミーティング®の質問の技カードにおける **Open Questions**（オープン・クエション）と **Eight types of Responses**（あいづち）を、以下のような児童たちの協同的な「やり取り」に活用することで効果的な指導に役立った。

「やり取り」例

- B, C, D: What do you want to be?  
A: I want to be a teacher.  
B: Why?  
A: (Because) I like Children.  
C: Tell me more.  
A: I'm good at singing.  
D: Tell me more.  
A: I want to sing with children.  
B, C, D: Thank you.  
A: Thank you.

さらに、授業の最後の活動として、ある児童が将来就きたい職業について書いたワークシートを紹介し、それを誰が書いたか当てる活動では、ホワイトボードに回答を書くなど、（ミニ）ホワイトボードを効果的に使用した。

授業後の協議会においても、ファシリテーション技術としてのホワイトボード・ミーティング®の手法を用いて行った。校長先生、教頭先生、視察に来ていた小学校の中学校の校長先生と英語科教諭、および研究協力者である本学大学院生が協議会に参加した。以下の3枚のホワイトボードは、協議会において話し合われた内容である。多くの参加者から、授業後の協議会において、深い情報共有ができて大変有意義であったという声が多く聞かれた。





< 2年目：糸魚川市立下早川小学校における取組 >

平成 31 年度（令和元年度）は、糸魚川市立下早川小学校において、外国語（英語）活動にファシリテーション技術を取り入れた協同的な活動への支援を行った。下早川市学校からは、以前より支援の要請あったため、今年度は本研究代表者とゼミの大学院生が実践指導として支援に当たった。また、当校における実践は、学校支援プロジェクトの一部としても位置付けられた。以下では、下早川小学校における外国語（英語）活動の実践とその研究成果の概要を述べる。

平成 31 年度（令和元年度）、糸魚川市立下早川小学校の校内研修における研究主題は以下の通りであった。

外国語に慣れ親しみ、コミュニケーションを図ることに学ぶ楽しさを実感できる  
児童の育成

研究推進部から頂いた資料によると、研究主題設定の意図および研究の視点は以下の通りであった。

○研究主題設定の意図

中学年「外国語活動」、高学年「外国語」が、令和 2 年度より全面実施となる。これを受けて、今年度は、外国語活動・外国語の研修を進めたい。

新学習指導要領は、急激な社会変化に対応する力を子どもたちに育むことを求めている。これからの社会は、高度な情報化やグローバル化、あるいはその変化の速さなどにより、予測困難な時代になっていく。そのような時代を生きていく子どもたちには、1つの自称を、より多面的、多角的に捉えられる見方や考え方が求められる。そして、それらは自ら考えを創造するとともに他者と話し合い、よりよい方法を導いていくことによって創造されていくものである。

新学習指導要領の外国語活動の目標に、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」と掲げられている。素地とは、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、獲得した基本的な外国語の表現を使って相手に伝えようとする態度であると考え。そして、それは、次の①～④を繰り返すことにより、培われるものと考え。

- ① 相手の話していることを、『自ら考え』理解しようとする。
- ② 自分の外国語を使って相手に伝えたいという思いをもって、話す文を『創造する』。
- ③ 相手（『他者』）に伝え、また相手から返事がもどってくる（『話し合い』）という喜びを体験する。
- ④ そして、次は『よりよく』伝えたいと感じる。

すなわち、外国語の学習を通して、コミュニケーションを図る素地を培っていく自体が、新指導学習要領が求めている子どもたちに育むべき力を身に付けさせることになる考える。

糸魚川市立下早川小学校の子どもたちは、授業などを通して外国語にふれ、楽しんで学んではいるが、自らの考えや思いを表現し、コミュニケーションを図る状態までには達し

ていない。

そこで、自らの考えや思いを表現し、コミュニケーションを図ることができる子どもたちを育てるための初歩のステップとして今年度の研究主題を「外国語に慣れ親しみ、コミュニケーションを図ることに学ぶ楽しさを実感できる児童の育成」とした。外国語に親しみつつ、コミュニケーションを思わず図りたくなるような外国語の学習を展開していくことで、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成に努めたい（下線には本研究代表者による）。

## ○研究の視点

### (1)

- ① 子どもたちの興味のある題材の選定
- ② 聞く必然性のある活動
- ③ 話す必然性のある活動
- ④ 教材の作成と活用の仕方

### (2)

- ① 「聞くこと」の活動
- ② 「話すこと」の活動
- ③ 「読むこと」の活動
- ④ 「書くこと」の活動
- ⑤ 子どもたちの興味ある題材の選定

以上のことから、当該校の課題と解決へのアプローチは、以下のように整理できる。

教育目標である「一歩前へ」進んで学び高め合う子の育成において、外国語等の学習を通して、自分の考えをしっかりと伝えることができるような授業を展開すること。しかしながら、自ら英語を用いたコミュニケーションを仲間とともに楽しむ段階には至っていない。従って、英語での真のコミュニケーションの実現を目指した、「学び合い、教え合い、励まし合い」の場を創造するという協同学習の理念や豊かな対話を持てるようなファシリテーションの考え方や技術（としてのホワイトボード・ミーティング®）に基づいた授業実践に基づき、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が必要である。

以下では、ファシリテーション技術と協同学習に基づく授業改善を目指した実践を紹介する。実践は3名の協力者に行ってもらった。本研究代表者は、教材の作成と指導内容を提案を行った。

## 1. 実践者1（4年生の活動）

単元は、What time is it? であった（4/4 時間目）。

時	■学習活動・予想される児童の反応	●協同学習・ファシリテーション
8分	■あいさつ ■Warm-up（7分） ・ホワイトボードに教師の質問に対する答えを記入する。	●児童の答えを全て読み上げ、承認する。ミニホワイトボードを使用する。 ●やり取りを通して日課の言い方

	<p>T: What time is your homework time? S: 6:00 T: What time is your snack time? S: 10:00</p>	<p>や午前・午後の言い方を思い出 すよう促す。</p>
<p>33 分</p>	<p>■本時のめあて、授業の流れを把握する。</p>	<p>児童の反応：</p> <p>教師が bed time, What time is it?や lunch time, What time is it?と尋ね、子供たちにミニホワイトボードに書いてもらい ALT の先生に発音してもらった。ただ時間を書いてもらうだけでなく、多重知能理論を取り入れ子供たちに絵も描いてもらったため英語が苦手な子も得意な子も楽しみながら取り組めた。また、ミニホワイトボードを掲げる場面では、ほかの友達が何時に寝たり起きているのか、何時にご飯を食べているのか気になっており、「え？そんな時間まで起きてるのー？」や「寝るのはや」など、子どもたちの反応が良かった。</p> <p>1 日の中で好きな時間を言えるようにしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●児童の実態に応じて、9種類の日課の言い方を確認してから行う。</li> <li>●<u>協同承認、個の役割、同時性、平等性</u></li> <li>●<u>班の中で役割があるようにする。「どのカードを覚えるのか、班内で相談して決めていた。」</u></li> </ul>



	<p>■ミッシングゲーム（6分）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>班のみんなで協力して missing card を探そうとする。班のみんなで協力して 10 枚の missing game を見つけようとする activity を取り入れた。子どもたちはミニホワイトボードになんのカードがなくなったのか、班のみんなで協力して描いていた。答え合わせをして、すべての missing card を見つけることができたとき、子どもたちの表情が笑顔で「よっしゃー」と叫ぶ子どももいた。見つけられなかった班も、同じグループ内で「惜しい」と言い合い、「次は絶対見つけよう」と切り替えができており良かったと思う。</p> </div> <p>■Let's Chant（4分）</p> <p>■Small Talk(15分)</p> <p>①3人組を作る</p> <p>②役割を決める</p> <p>A：話始める人</p> <p>B：聞き手</p> <p>C：カードで操作する人</p> <p>③時刻カード（トランプ）と日課カードを机の上に並べる。</p> <p>④教師のデモンストレーションを見る。その後内容を英語でのやりとりを通して確認する。</p> <p>A: I like 6 p.m.</p> <p>B: Yes. (C:6のカードと pm のカードを選ぶ) Why?</p> <p>A: It's dinner time. I like gyoza. It's delicious.</p> <p>B: Good! (C 夕食のカードを選ぶ)</p> <p>So you like 6 p.m. It's dinner time. You like gyoza?</p> <p>A: Yes! (3人ハイタッチ)</p> <p>間違えたら、A がもう一度言う</p>	
3分	<p>■本時を振り返り、次回の活動の予告をする。</p> <p>・同じ時刻でも人によって生活が違う</p>	<p>●協同学習の視点で振り返りを行う</p> <p style="text-align: center;">②</p> <p>●次回の活動内容を伝えることで</p>

	<p>ことが分かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ時間が好きでも、理由が違うことが分かった。</li> <li>・理由も伝えることができた。</li> <li>・相手にしっかり伝わってうれしかった。</li> </ul>	<p>子どもたちに見通しを持ってもらおう。</p>
--	---	---------------------------

## 2. 実践者2（5年生の活動）

単元は、**She can run fast He can jump high** であり、以下、2つの活動を開発し、実践した。

### （1）ホワイトボードを用いた協同学習の実践

#### Can you answer the question?

本実践の課題は、「チームで力を合わせて計算しよう！」であった。活動の内容は、封筒の中の数字を全て足した答えをホワイトボードに書いていく活動だった。グループを作り、みんなで力を合わせて難しい足し算に取り組んだ。

児童の様子および感想は次の通りである。活動の同時性や、平等性に配慮したことによって難しい課題に対しても協同的に取り組んでいる様子であった。例えば、「私がこの問題に取り組むね～」や「私はこれをやるから。～ちゃんはこれをやってね」など児童が積極的に仲間に声をかけながら周りをサポートしていた。また、授業後の振り返りには、周囲と協力することに対しての肯定的な意見や仲間の良さや頑張りをみとめ「承認しあう」ことよさを感じているコメントが幾つか見られた。


### （2）ホワイトボードのイラストを活用したスモールトークの実践（毎時の授業の帯活動として）


本実践の課題は、「周りの仲間にオープンクエスチョンを用いてインタビューしてみよう！」であった。活動の内容は、ホワイトボードにイラストを描いて（好きな食べ物、動物など）そのイラストについてオープンクエスチョンを用いてスモールトークを実践した。

児童の様子および感想は次の通りである。児童はホワイトボードに思い思いに絵を描いていた。また、そのボードの絵を見て授業者が温かい言葉で称賛し「承認すること」を常に意識した。そして、「児童の心の体力」を温かくするために、エンパワーするように心がけた。また失敗・間違い OK の雰囲気づくりに取り組み、どんな意見も大事にされることを児童たちは感じていた。（仲間の意見を笑わない）「オープンクエスチョンは最初難しかったけれどだんだんと言えるようになった。」、「仲間の意見を笑わないように頑張れた。間違えても仲間で教えてくれた。」など最初はなかなかうまくできない部分もあったが、毎回の活動で児童がオープンクエスチョンを使いこなしながら、コミュニケーションを楽しんでいる様子が見て取れた。

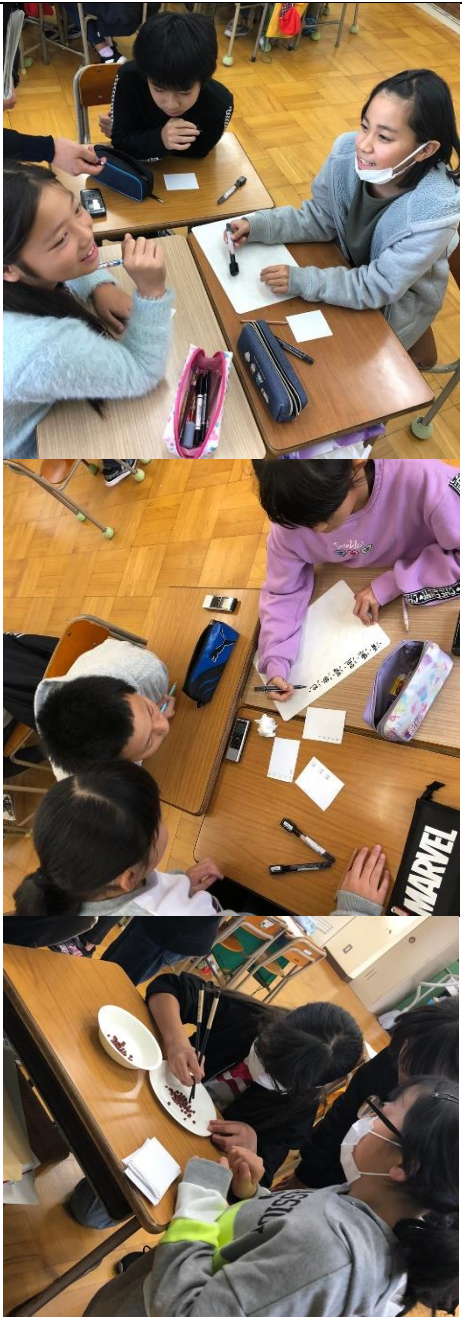
## 2. 実践者2（4～6年生の活動）

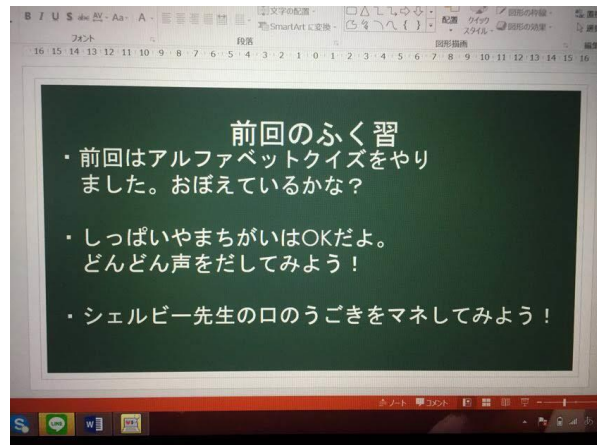
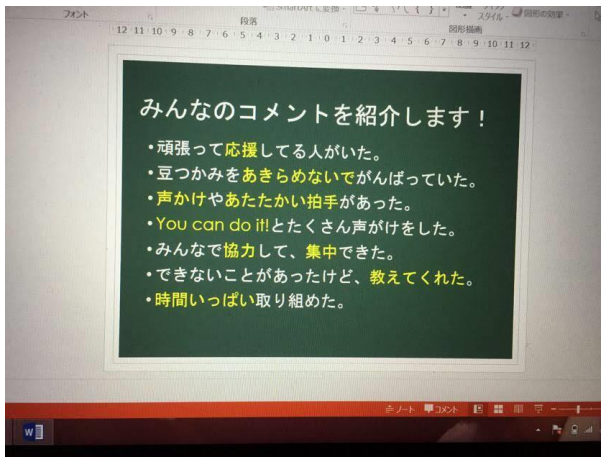
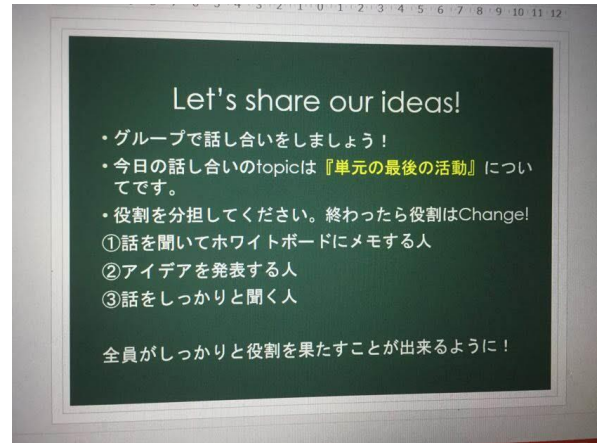
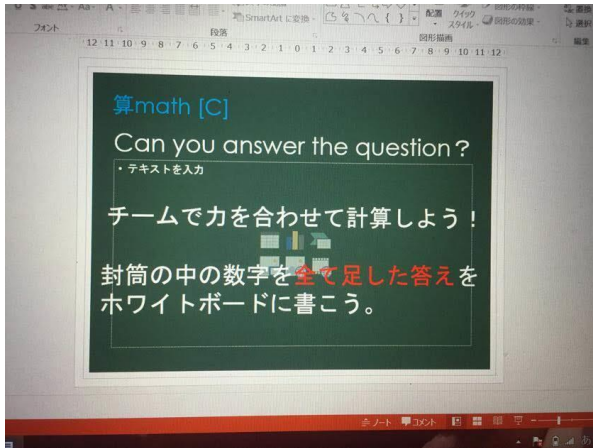
対象学年 単元名	活動内容	ファシリテーション 〈F〉 ミニホワイトボード活用 〈MWB〉 オープנקエッション 〈OQ〉	児童の反応
6年 Unit5 My summer vacation	<p>【Warm Up】 ①What's your name? ②How are you?数字 ③Where did you go? をクラス全員に尋ねる。 ③は、3人の級友と伝え合う。</p>	<p>〈MWB〉 ・ファシリテーター（教師）は全員のボードを読み上げる。〈F〉 ・英語が書けない子は日本語でも OK とした。〈F〉イラストは上手に書く必要はないと伝えた。</p>	<p>・ミニホワイトボードが物珍しそうであった。 ・ローマ字が書けない子が多く、完ぺきではなくても何とか書けた物を見せてくれ、それを教師に正しく読んでもらえたら笑顔を浮かべた。（ローマ字がきちんと書けてよかった、という安心感かな？） （・②の質問には、数字を低く書いた児童がおり、その後の授業で気に留めるよう努めた。後から思えば、英語が苦手な児童であった。子どもの状態をアセスメントする材料となった。）その児童も③の質問でイラスト描くのに夢中になっていた。描いたイラストをほめたり関心を持っている態度でコメントしたりするとうれしそうであった。</p>
4年 Unit4 What time is it?	<p>【Let's Talk】 上記の③に加え、 ④I ate …. と食べた物を言い、味や感想も付け加えることに挑戦</p>	<p>〈MWB〉 ・上記の活動③で書いたイラストに、食べ物のイラストを描き加える。〈F〉 Warm Up のでの会話活動がメインの活動につながるように狙った。 ・オープנקエッション “Tell me more”を使って、会話を深めた。〈OQ〉</p>	<p>・英語が言えなくても、イラストを見ればわかる。足りない部分をイラストで補いながら笑顔でコミュニケーションができていた。 ・英語でなんて言えばいいかわからず、そこにこだわる子には、日本語でも良いことを伝え、できる範囲で活動すればいいことを伝えるが、「完璧」にこだわってしまうのか満足できていない顔の子もいた。 反省：時間があれば、全員分を見て、読み上げてあげればよかった。</p>

		か、というようなことが避けられる)し、それを読んでもらえて子どもたちはいい表情をしていた。
”	<p><b>【Small Talk】</b> ※〈協同的〉</p> <p>①3人組を作る          ②役割を決める          A：話始める人 B：聞き手 C：聞き取ったことを再現する人          ③時刻カード（トランプ）と日課カードを机の上に並べる。</p> <p>A: I like 6 p.m.          B: (Cは6のカードとp.m.を選ぶ) Why?          A: It's dinner time. I like gyoza. It's delicious.          B: Good! (C夕食のカードを選ぶ) So you like 6 p.m. It's dinner time. You like gyoza?          A: Yes! (3人ハイタッチ)</p>	<p>・スモールトークの一つ前の段階の活動として組んだ。Bの子はAの話を傾聴し、CはAの話を理解しカードを並べる+口頭で再現することで、「ちゃんときいていたよ（承認）」ということが示せると考えた。</p> <p>反省：難しいようだった。</p> 

<p>4年 Unit4 What subject do you like? (?)</p>	<p>【グループ でたくさん 話そう】： まとめの活 動 ①Aが夢の 時間割を一 つの曜日分 話す(一番 好きな曜 日)。 ②続けて、 BCが質問 やあいづち をしながら、 会話を 深めてい く。 ③Dがその 発話数を記 録して、全 員のトー タルの発話 を増やそう とした。</p>	<p>〈MWB〉 〈OQ〉 ・一人がどのくらいたくさん 話せたか、ではなくて、班で どれだけ会話ができたか。 ・苦手な子も、あいづちだけ でも可とした。途中伸びてい るかどうかを確認し、クラス 全体に伸びていたの、さら に励まし、動機づけた。 〈F〉 ・競争ではないことを伝える。</p>	 <p>・発話の数が視覚化され、(やっ ていくうちに慣れて自然と発話は 増える)増えると班で喜び合っ ていた。 ・「必ず一人一回は発話」という ルールもあったので、苦手な子に 仲間が発話を促す場面があった。</p>
<p>//</p>	<p>【Warm Up】 ほぼ毎回、 帯活動とし てスマール トークを行 う。 好きな食べ 物、動物、 スポーツ、 学校行事 (地域)</p>	<p>〈MWB〉 話す前に、イラスト を描く。 〈OQ〉 Tell me more. Really などの表現を繰り返して 使う機会を設ける 〈F〉 参加できない(しない)子 も認める。話し終わった後、全 体で共有する際、イラストを全 体で見せ合い、1人1人何を 描いているのか推測しあった。 (全員分)→承認</p>	<p>・絵を描くのが楽しそう。誰 にも分からなさそうな絵を描 いて、得意げな子もいた。 ・「もっと相手のことを深く 知りたいときの魔法の言葉」と して伝えてあった。テキスト には出てこないし、新潟では 下早川しかこの言葉を使っ ていないと伝えたら、うれし そうに Tell me more.を使 っていた。 ・イラストにこだわりすぎて 書けない子がいた。無理に参 加せず、友達の英語に耳を 傾げるだけでもいいことを 伝え、参加の仕方をゆだねた。</p>
<p>//</p>	<p>【ゲーム】 ①曜日の言 い方を覚え るゲーム ②好きな曜 日一致ゲー ム ③アイコン</p>	<p>〈F〉 プロジェクト アドベンチャー の活動の応用 ・活動の中に、少し恥ずかし いこと(サルのポーズ、足首 握手、目を合わせる等)を行 い、それに挑戦し、克服する ことで、その後の「英語を話</p>	<p>・特別な支援が特に必要な 2人が生き生きと本当に楽し そうに友達と関わっていたの が印象的。</p>



	タクトゲーム	すことの抵抗感」みたいのを下げようと試みた。	
5年 Unit5 She can run fast. He can jump high.	<p>【Warm Up】 We Can Game ①教科横断された課題を Can you …? という形で出題され、それらに班や個人で挑戦するゲーム</p> <p>〔国語〕サングズの漢字が書けますか？ ・個人→グループ</p>	<p>・ゲーム全体を通して、「挑戦しない」という選択肢を設けた。結果はどうであれ、挑戦するとポイントが入るルールにした。〈F〉</p> <p>・多様なジャンルの課題を用意し、自分の得意分野で活躍できるチャンスを用意した〈F〉</p> <p>・漢字を書き出す際に〈MWB〉使用。</p> <p>・個人（戦）での頑張りがチームの得点にも関係するので、みんなで応援し合ったり教え合ったり励まし合ったりできた。</p>	 <p>・英語が得意な子もそうでない子も意欲的に活動していた。 ・友達の良さやがんばりを認める感想がおおくあった。</p>





### 研究の成果

- (1) 児童の発表に対する不安を軽減するだけでなく、子どもたちの動機付けを高めることができた。
- (2) 児童たちの話し合うことに対する肯定的な意識を向上させることができた。
- (3) 自分の力を仲間のために使うことに対する肯定的な感情を高めることができた。